ニュースレター「がん１１０番」第69号 **2015.8.20**

NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

● Dr.井上林太郎の書籍紹介

未来のことは未来の私にまかせよう
－３１歳で胃がんになったニュースキャスター－
黒木奈々著　文藝春秋　2015 年 3 月初版

はじめに

2015 年 1 月 4 日。この日は特番。久しぶりの仕事だ。午後 2 時、マネージャーの鈴木さんと一緒に『国際報道 2015』のフロアに入った。

「私が、今日ここにいられるのは奇跡だと思います。8 月 27 日、がんを告知されたのを最後に番組をお休みさせていただきました。その後、手術を受けました。手術の前日に皆さんからいただいた色紙がものすごく励みになりました。今日、復帰することを目標にずっと治療してきました。皆さんの支えのおかげで、ここまで来ることが出来ました。本当にありがとうございます。」

言い終えるや、感極まって号泣してしまった。温かい拍手で皆が励ましてくれた。そして、午後 6 時 10 分オンエア開始。

「あけましておめでとうございます。国際報道 2015 です。」思ったよりも冷静な声が出た。番組終了後の反省会では、感激し、やっぱり泣いてしまった。「今日オンエアを無事に終えられたのは、皆さんの支えがあったからこそです。治療を終えて、また必ず皆さんとお仕事ができるように頑張りますので、よろしくお願いします。」皆が「絶対にまた帰って来てね」と言って下さった。幸せだった。また、頑張ろうと思った。

著者の紹介

1982 年 11 月 12 日、鹿児島市で生まれる。小学生の時、将来はアナウンサーになると決めた。安藤優子、三雲孝江、河野景子さんら有名アナウンサーが、上智大学の出身と知り、2001 年同大学フランス語学科に入学。在学中、フランスへ留学。2006 年 4 月毎日放送に入社。その後フリーに転向し、2007 年 4 月から、「TBS ニュースバード」のキャスターとなる。2011 年 4 月 NHK BS のニュース番組のサブキャスターへ転職。2014 年 4 月、「国際報道 2014」のメインキャスターに抜擢された。同年 8 月 27 日胃がんと診断され、翌日より休養に入った。

著者の病歴等

2014 年 7 月 27 日(日)、友人とレストランで会食中、突然胃に激痛がはしり、救急車で救急病院を受診。精査の結果、胃の穿孔が原因とわかった。手術を勧められたが拒否し、保存的に加療。8 月 18 日から仕事に復帰。25 日再度同病院で胃カメラ施行。穿孔は治っていたが、ピロリ菌がいることがわかった。詳しい結果

は後日ということであった。8 月 27 日、番組終了後、お父様から、病院から悪性細胞があったと連絡があった、と電話があった。9 月 5 日、セカンドオピニオンを求めて、がん研有明病院を受診。同病院への転院を決めた。3 日後、胃カメラ施行。初期のスキルス性胃がんであると告げられる。9 月 19 日手術。10 月 29 日より、再発リスク軽減目的で、抗がん剤治療が始まる。

翌年 1 月 4 日、1 日限定で「国際報道 2015」に復帰。2 月、本闘病記を脱稿。3 月 30 日より、毎週月曜日限定で仕事をされている。

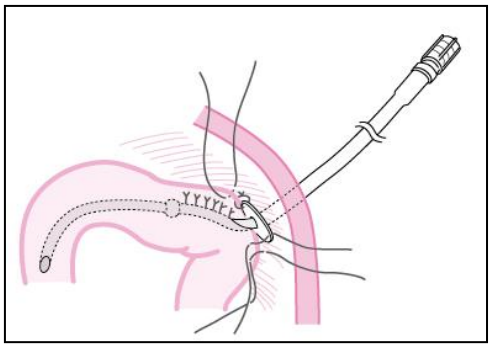
本書の内容・感想

8 月 27 日、帰宅後、所属する事務所の社長に電話。彼女は、降板も覚悟していた。

『私はストレートにこう切り出していた。「降板でしょうか？」答えは聞きたくない。でも、私の予想していなかった言葉が返ってきた。「NHK の皆さんは、『降板じゃなくて、ずっと待っているから』と言って下さったよ。」私は号泣した。こんなにうれしいと思ったことはないかもしれない。私の人生そのものだった大好きな仕事が奪われる恐怖から少しだけ解放されて、生きる希望がわずかにできた。』

彼女は、「復帰」することを目標に治療に専念することになった。

主治医は、当時副院長であった消化器外科、山口俊晴先生(現在は病院長)、担当医は速水克先生。9 月 17 日入院。15 時過ぎから山口先生より手術の説明があった。まず、お腹に穴を開けて転移がないか、内視鏡でみる。転移があった場合、抗がん剤を使って、がんを小さくして、二、三ヵ月後に改めて手術する。そして、以下抜粋する。『「もし開腹で胃を全摘できた場合、黒木さんには普通の人にはやらないことを提案したい」と山口先生が言った。「あなたには早く社会復帰してもらいたい。テレビに出る方ですから、ガリガリじゃダメでしょ。すぐ栄養をとれるように、細いチューブをお腹の脇から入れておきましょう。術後、口から食べられたら使わなくてもよいけれど、どうしても食べられない時はチューブから直接腸に栄養剤を入れて、痩せすぎないようにする。そうすれば見た目もさほど変わらないから。」いわゆる「腸ろう」と呼ばれるものらしい。即座にやることを決心した。』



さらに、今回見つけられなかったら、二年後には命はなかったとはっきり言われ、これまで「死」がこんなに近くにあったなんて考えたこともなく、怖かったそうである。　幸い転移はなく、19 日手術はできた。

10 月 20 日、退院後初めての外来。まず山口先生の診察があり、その後、消化器内科の高張大亮先生より、抗がん剤等の説明があった。ステージはⅢで、今後 5 年の間に、60～70%の確率で再発する可能性がある。最初の 2 年までが非常にリスクが高く、5 年を過ぎたらほぼ再発はない。再発のリスクを減らすために抗がん剤治療をやったほうがよい。ステージⅢの人への標準補助的化学療法は、「TS-1」という飲み薬を服用するのが一般的だが、TS-1 と「シスプラチン」という点滴タイプの抗がん剤を組み合わせることを勧める。TS-1 単独では、再発のリスクを 10%減らすことができるが、シスプラチンを加えると、さらに 35～50%に減るからだ。ただし、日本ではまだ一般的ではない。

具体的には、まず TS-1 を 4 週間、毎日朝夕 2 回飲んで、その後 2 週間は何も飲まない休薬期間がある。これが 1 クール目。2 クール目は 3 週間 TS-1 を毎日飲んで、その後 2 週間はお休み。ただし 2 クール目では、TS-1 を飲みはじめて 8 日目にシスプラチンを点滴で投与する。この薬はひどい吐き気や腎障害を引き起こすため、入院が必要。3 クール目、4 クール目は、2 クール目と同じ。シスプラチンの投与は 3 回。5 クール目以降は TS-1 のみになって、4 週間飲んで、2 週間休みというサイクルが 1 年続く。さらに。

「速水先生から聞きましたが、黒木さんが復帰を希望している 1 月 4 日の特番はちょうど 2 クール目の休薬期間にあたります。出演することができるはずです。全 3 回のシスプラチン投与も、うまくいけば 2 月ですべて終わります。3 月から TS-1 だけになるので、頑張って 4 月から仕事に復帰してほしいです。」

実際には、10 月 29 日から第 1 クール開始。12 月 10 日から、第 2 クール開始。16 日入院し、17 日にシスプラチンの点滴を受けた。投与から 3 日目。吐き気、倦怠感、眠気等の強い副作用が出始めた。食事がとれない。予定では 21 日に退院するはずだったが延期。状態は悪かったが、24 日退院。28 日頃より体調が戻り、1 月 4 日に間に合った。

本書は 1 月 5 日で終わる。

『明日は久しぶりの外来だ。2 週間後には、2 回目のシスプラチン投与が待っている。また、シスプラチンの副作用の吐き気と味覚障害が待っていると思うとつらいけど、それもなんとか乗り越えられそうな気がする。1 回目も乗り越えられたのだから。今は目の前にある現実に一歩一歩取り組んでいく。きっと結果はついてくる。「生きてさえいればなんとかなる。今やるべきことは今の私が全力で取り組んでいく。その先の未来のことは未来の私にまかせる……。」ドイツのまきちゃんの言葉を思い出した。　そうだ。未来のことは未来の私にまかせて、私は今できることをやり続けるしかないのだ。

1 月 4 日を目標に頑張ってきた。つらいこともあったけれど、それに負けないように闘ってきたから、昨日があった。緊張したけれど、昨日は番組に戻れてうれしかった。やっぱり私はキャスターをやっていきたい。他の仕事をやれと言われても、もうこの仕事しかできない気がする。私はやっぱりニュースキャスターなのだ。昨日、オンエアが終わった時、決意を新たにした。必ずがんを治して、この場所に戻ってくる……。』

私も時々、今後また別のがんに罹り…とか、脳梗塞、認知症になったらどうしようかとか不安になる。が、私もまきちゃんの言葉を思い出し、未来のことは未来の私にまかせて、今やるべきことやろうと決意した。

理事　井上　林太郎